

氏 名	小 澤 望 美		
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)		
学 位 記 番 号	第 5062 号		
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 29 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項		
学 位 論 文 名	Retrospective Review : Usefulness of a Number of Imaging Modalities Including CT, MRI, Technetium-99m Per technetate Scintigraphy, Gallium-67 Scintigraphy and F-18-FDG PET in the Differentiation of Benign from Malignant Parotid Masses (CT、MRI、唾液腺シンチ、ガリウムシンチ、FDG-PETを用いた耳下腺部腫瘍の良悪性鑑別における各種画像診断の有用性の検討)		
論文審査委員	主 査 教 授 井 上 佑 一	副 査 教 授 山 根 英 雄	
	副 査 教 授 塩 見 進		

## 論 文 内 容 の 要 旨

【目的】耳下腺部腫瘍の鑑別における各種画像診断の有用性を検討した。

【方法】対象は耳下腺部腫瘍を有する患者59人（男34人、女25人）である。内訳は多形腺腫が22例、ワルチン腫瘍が11例、悪性腫瘍が10例、炎症が13例、その他が3例。これらの患者に対し、CT、MRI、FDG-PET、唾液腺シンチ、ガリウムシンチを施行した。CTおよびMRIで病変の辺縁の性状、MRIの信号強度、シンチグラムにおける集積の有無および程度、FDG-PETでの集積程度を示すSUVにつき評価した。

【結果】CTまたはMRIで病変の辺縁はすべての多形腺腫、ワルチン腫瘍において整であった。MRIでのT2強調画像で高信号を示す部分のうち一部が増強効果を受けているものは多形腺腫で高率に認められた。唾液腺シンチではほぼ全例のワルチン腫瘍で集積、酸投与後の残存を示したが、それ以外の病変は集積を示さなかった。ガリウムシンチでは多形腺腫の集積は様々であり、ワルチン腫瘍では集積を認めなかった。悪性腫瘍、炎症性病変はともに強い集積を示すものが多く、両者の鑑別は困難であった。FDG-PETでSUVは多形腺腫では一定した傾向がなく、ワルチン腫瘍、悪性腫瘍で高値、炎症性病変では比較的低値を示し、炎症性病変と、悪性腫瘍、ワルチン腫瘍との鑑別の可能性が示唆された。以上より、まずMRIで辺縁の評価をし、辺縁が不整である場合はFDG-PETにより良悪性の鑑別を行い、辺縁が整である場合は唾液腺シンチ、FDG-PET、MRIを組み合わせで鑑別するのがよいと考えられた。

【結論】各種画像診断を効率良く組み合わせることにより、耳下腺部腫瘍の鑑別が可能と考えられた。

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

耳下腺部腫瘍の術前に腫瘍の良悪性および組織診断が望まれる。本論文は耳下腺部腫瘍の術前の各種画像診断の有用性を、後ろ向きに検討した論文である。

対象は耳下腺部腫瘍を有する患者59人(男34人、女25人)で、内訳は多形腺腫が22例、ワルチン腫瘍が11例、悪性腫瘍が10例、炎症が13例、その他が3例であった。これらの患者に対し、CT、MRI、唾液腺シンチ、ガリウムシンチ、FDG-PETを施行した。CTおよびMRIで病変の辺縁の性状、MRIの信号強度、シンチグラムにおける集積の有無および程度、FDG-PETでの集積程度を示すstandardized uptake value (SUV) につき評価した。

その結果、CTまたはMRIで病変の辺縁はすべての多形腺腫、ワルチン腫瘍において整であった。MRI T2強調画

像で高信号を示す部分のうち一部が増強効果を受けているものは多形腺腫で高率に認められた。唾液腺シンチではワルチン腫瘍の全例で集積、酸投与後の残存を示した。それ以外では、粘膜表皮癌の1例を除き集積を示さなかった。ガリウムシンチでは多形腺腫の集積は様々であり、ワルチン腫瘍では1例を除き集積を認めなかった。悪性腫瘍では10例中9例、炎症性腫瘍では12例中9例が集積を示し、両者の鑑別は困難であった。FDG-PETでSUVは多形腺腫では一定した傾向がなく、ワルチン腫瘍、悪性腫瘍で高値、炎症性病変では比較的低値を示し、炎症性病変と、悪性腫瘍、ワルチン腫瘍との鑑別の可能性が示唆された。以上より、まずCTまたはMR1で辺縁の評価をし、辺縁が不整である場合はFDG-PETにより良悪性の鑑別を行い、辺縁が整である場合は唾液腺シンチ、MRI, FDG-PETを組み合わせで鑑別するのがよいと考えられた。これらの画像検査法を組み合わせflow chartを作成し、耳下腺部腫瘍の画像診断を行えば、正診率は約81%、良悪性の鑑別は約83%であり、耳下腺腫瘍の鑑別が可能と考えられた。

本研究は各種画像診断法を効率良く組み合わせることにより、多くの耳下腺部腫瘍の良悪性の鑑別および組織診断が可能であることを示した。以上を総合的に判定した結果、本研究は博士(医学)の学位を授与されるに値すると判定された。